

〔論文〕

日本の「マツリ」を持ち込んだ日系ブラジル人 多文化社会に生きる自己の新たな表現手段として

渡会 環 (Tamaki WATARAI)

上智大学

はじめに

1992年に北海道札幌市で始まった「YOSAKOIソーラン祭り」は1990年代後半から末にかけてブラジルの日系社会においてもその名が知られるようになり、祝祭で踊られる舞踊の「YOSAKOIソーラン」を日本文化協会、日本語学校、日本民俗舞踊団体等の日系諸団体が積極的に導入し始めた。2006年12月の時点での導入団体は少なくとも30を数える¹。

各団体がYOSAKOIソーランを導入して踊り始めた経緯はそれぞれに異なるが、その中で次第にブラジルの文化の諸要素を意識的に混ぜて、日本の「YOSAKOIソーラン」とは異なるブラジル独自の「YOSAKOI SORAN」を創作する動きが出てきた。このような変化を考慮して本稿では、日本で日本人によって踊られているものを「YOSAKOIソーラン」、ブラジルでブラジ

ル人によって踊られているものを「YOSAKOI SORAN」と表記を別にする。

30団体はいずれも日系の団体あるいは企業や日系人個人と関係があるため、YOSAKOI SORANに取り組むブラジル人のほとんどは日系人である。しかしながら、日系人参加者²はYOSAKOI SORANを日系社会内部の活動として留めたり、「日系社会」や「日系人」のアイデンティティを表現する手段として利用したりはしていない。日本の舞踊を受容し変容させる過程において彼/彼女らの母国であるブラジルや自身に対して再帰的³となった日系人参加者

²日本のYOSAKOIソーラン祭りに参加する日本人は「踊り子さん」等と呼ばれ、一人の踊り手としての意識を強く持つことが求められる。一方、ブラジルでYOSAKOI SORANを踊る者は、一般的に「参加者(participante)」と呼ばれる。彼/彼女らが、既存の文化団体に参加している中で活動の一つとしてYOSAKOI SORANに取り組むようになったこと、活動目的をコンクールの出場に設定していないことを考慮すると、適切にも「参加者」と呼ばれているといえる。

³「再帰性(reflexivity)」とは、人々が自身の行為や社会文化から距離をとって、それらを客体化して言及することを意味する(Babcock 1980; Myerhoff & Ruby 1982)。そもそも儀礼や舞踊等の人間のパフォーマンスには規定の行為を遂行することを超えて、人々に自分自身や社会について再帰的にさせる作用が強いことが、ターナーらによって指

¹筆者が活動を確認したか、あるいは確実な情報源からその活動を知ることができた団体のみがこの数字に含まれている。このうち26団体が日系人の二大集住州であるサンパウロ州とパラナ州で活動している。この他にも10団体程度が導入したようである。

は、実際に非日系人を参加者に取り込んで、多様な民族的、文化的背景を持った人々と関わり合いながらブラジルに生きる自己を表現できる手段として YOSAKOI SORAN を捉えるようになった。

今日のブラジル日系人のアイデンティティに関する先行研究は、一世が確立しようとしてきた本質的な「日本人」としてのアイデンティティとは異なる「ニッケイ (nikkei)」アイデンティティを若い世代が形成している指摘する(山ノ内 2003; 小嶋 2005; 小嶋 2007)。しかし、YOSAKOI SORAN に参加する日系人は舞踊を通じて「日系人」という枠に自らを収めない、彼/彼女らのアイデンティティを表現しようとしている。

そこで本稿は、YOSAKOI SORAN をブラジルの日系人、特に若い世代の間で形成されつつある新しいアイデンティティの表出として着目し、彼/彼女らがエスニックな枠に自らを収めないアイデンティティを形成あるいは確認する過程を明らかにすることを目的とする。

本稿は、アイデンティティ形成の鍵を握る、ブラジルの日系人の参加者が日本の YOSAKOI ソーランを受容し、変容させ、完成させた舞踊から創作過程を省みる、という展開の段階に一致させる形で、以下のような構成で論を進める。

まず、1990 年代に札幌市で誕生した舞踊 YOSAKOI ソーランをなぜ、またどのような形でブラジルの日系社会の文化団体が受け入れたのかを、日系社会内部の変化とブラジルの多文化政策と関連付けて分析する。次に、実際の創作過程において日本とは異なるブラジルの YOSAKOI SORAN の独自性が参加者によってどのように

追求され、YOSAKOI SORAN に表現されたのかを、参与観察や聴き取り調査の結果をもとに再現する。日本とブラジルの文化的諸要素を比較し、それらを混ぜ合わせてブラジル独自の舞踊を創作することによってブラジル社会と個人について再帰的となった日系人参加者が、これまでとは異なる文化観、民族観を発展させつつあることを指摘する。それは従来のブラジルの「日系人」の捉え方に再考を迫るものとなる。

本稿は、2003 年以來 3 回にわたり、YOSAKOI ソーランを導入したブラジルの 9 団体に対して行った参与観察およびアンケート調査から得られたデータを使用して考察したものである⁴。

日本の祭りから誕生した「YOSAKOI ソーラン」

YOSAKOI ソーラン祭りは日本の現代的な祭りである。「祭り」とはいても、YOSAKOI ソーラン祭りは神社や神事との関りはない。踊るこ

⁴ ブラジルでのフィールドワークであるが、具体的には 2003 年 8 月から 2004 年 5 月、2004 年 5 月から 7 月、2005 年 7 月の 3 回にわたり、サンパウロ州及びパラナ州で実施した。第 1 回目の調査では、日本の YOSAKOI ソーランを導入した団体の概要と参加者の属性を把握した上で、舞踊導入の過程を調査した。アンケート調査で、参加者の属性、YOSAKOI ソーランに対する印象などを把握した。第 2 回目の調査では、各団体が独自の振付をしていく過程を観察することに重点を置いた。第 3 回目の調査では、3 年間における創作方針の変化といった、時系列的な調査事項を念頭に置いた。調査対象団体には次の 5 団体を選択した。サンパウロ市で社員教育や社員の社外活動の一環として YOSAKOI SORAN に取り組む企業、同市の青年の YOSAKOI SORAN サークル、サンパウロ州内陸部で活動するバレエ団、パラナ州で活動する日本文化団体、パラナ州の非営利の文化慈善協会に属して活動する YOSAKOI SORAN グループ、の 5 団体である。これらの団体を選択したのは、独自の振付に既に挑んでおり、1 週間で舞踊創作を完成させる団体もあるなかで創作に適度な時間をかけていたためである。これらの 5 団体を中心に調査を行ったが、調査開始時には独自の振付に取り組んでいなかった、サンパウロ州の日本民俗舞踊団体、日本語学校及び幼稚園の生徒と父兄からなる団体、青少年の日本民謡団体、日本語学校及び初等教育機関の生徒と父兄からなる団体、の 4 団体にも参与観察とアンケート調査を行った。日本の YOSAKOI ソーラン祭りがブラジルに伝えられた過程を把握するためには、できるだけ多くの団体から、YOSAKOI ソーランの導入の経緯、参加者の属性、踊りの印象などについて話をきく必要があったためである。

摘されてきた(ターナー 1981)。人々が自分自身について、また自身を取り巻く社会や文化について再帰的に考えると、それらに対する認識そのものも変化しうる(Babcock 1980)。

とを通じて人々が楽しむこと、それがYOSAKOIソーラン祭りの目的である。YOSAKOIソーラン祭りに向けて人々は、大学、企業、地域など、様々な縁によって結びつき、数十人から100人強の踊り手から成る団体を結成して、祭りに踊りで参加する。

YOSAKOIソーラン祭りの参加には、高知県高知市のよさこい祭りで用いられる「鳴子を手を持って踊ること」、そして北海道の民謡である「ソーラン節の一節を曲の中に入れること」、この2つのルールが課せられる。だが、この2点を踏まえてさえいれば、振付は自由である。衣装も音楽も自由に選択できる。こうしてYOSAKOIソーラン祭りから、この祝祭に参加するためのルールに則して踊られる創作舞踊が誕生した。この創作舞踊が一般的に、「YOSAKOIソーラン」と呼ばれるようになった。

全体的な傾向として、ソーラン節がロック調などの速いリズムにアレンジされ、そのリズムに合わせて参加者が踊るため、動きが力強いものとなっている。衣装は日本の祭りの衣装に着想を得ているものが多い。股引、ラメの入った半纏が着用されている。

このYOSAKOIソーランが今日、札幌市の祝祭空間から脱け出して日本全国各地で踊られている。YOSAKOIソーラン祭りが札幌市の新しい祭りとして定着して町おこしに一役買い、地域のアイデンティティの形成や確認の機能を果たした⁵ことから、同様の効果を期待した他の市町村がYOSAKOIソーラン祭りをモデルにした祭りを始めたのである。

⁵そもそも、YOSAKOIソーラン祭りの開催は、高知県のよさこい祭りに着想を得ている。しかし、よさこい祭りをそのまま札幌市に移植するのではなく、北海道民謡「ソーラン節」という地域的要素を加えた。こうして独自性を強めたことが、祭りに関わる人々を北海道という地域に対して再帰的にさせたのである。

伝統民謡と現代音楽が混ぜ合わされていることから、YOSAKOIソーラン祭りは「新奇」な祭りとして捉えられる傾向が強い。しかし、民俗学者の柳田國男は、日本の都市の祭りが祭りに参加しない「見物人」を惹き付けるために常に新しい意匠を凝らしてきたことを指摘している（柳田1998）。また、地域住民の間の絆を強めるということは、祭りが旧来より果たしてきた機能である。そもそも日本のYOSAKOIソーラン祭りも、祭りのそのような機能を評価していたからこそ始まったのである。この、新しい意匠を凝らした祭りを通じて人々の間の絆を強めていた日本のアイデアが、1990年代末にブラジルの日系社会の人々にも受け容れられることとなる。

ブラジルに持ち込まれたYOSAKOIソーラン
ブラジルの日系社会もまた日本の各都市と同様、祭りを必要としている状態にあった。ブラジルの日系社会では、日本からブラジルへ移民が開始されてから既に100年が経とうとしており、日本語のできる一世の世代が減少、日本移民の子弟と他国出身の移民の子弟間で婚姻が増加し、日本での就労者の増加などによって家族や親戚また友人と離れて暮らす者が増えて、日系人の間の絆が弱まっている。

これらを日系社会の消滅の兆候として危惧していた戦後移民一世の中から、YOSAKOIソーランを導入して日系社会の活性化を図ろうとする人々がでてきた。彼/彼女らはYOSAKOIソーラン祭りの模様が収められたビデオテープを見て、祭りが参加者の間に醸成する一体感を評価し、YOSAKOIソーランの導入によって日系人同士の絆が強まることを期待したのである。

YOSAKOIソーランを導入した戦後移民の一世は、日本に生まれ育ち成人になってからブラ

ジルに移住し、ブラジルで「日本人」としての意識を強く持つようになった人々である。彼/彼女らの子どもたちや若い世代の日系人に日本文化を伝えたいとの思いから民俗舞踊や三味線などをブラジルで教え始めた。現在 50~60 歳代となった彼/彼女らは、文化団体の代表者としての責任感を強め、一世として次世代への日本文化継承を案じている。

だがこれまでの経験から、伝統的な日本文化を伝えることの難しさも感じていた。若い世代の日系人が日本文化に興味を持つ契機としても、現代的なリズムや動きからブラジルでも受け容れられやすい YOSAKOI ソーランに注目している。

彼/彼女らは YOSAKOI ソーラン祭りの存在を、日本との直接のチャンネルを通じて知った。日本語を母国語とし、日本の親戚とのコミュニケーションを欠かさない彼/彼女らは、日本の情報を常に収集してきた。

YOSAKOI ソーランの導入に積極的ではあったが、この世代は自身が踊ることはない。日本の YOSAKOI ソーラン祭りで既に販売されていた振付解説付きのビデオテープを入手して、これを三世以降の若い者に見せて、覚えさせた⁶。

踊る側である三世以降の若者も、YOSAKOI ソーランの導入に積極的に関ったもう一つの世代である。国際交流事業や留学で日本を訪れたことなどにより YOSAKOI ソーランを知った彼/彼女らは、踊りそのものの楽しさからと日系団体の新しい活動として YOSAKOI ソーランを提案する形で、帰国後に同年代の仲間たちに舞

踊を紹介している。

YOSAKOI ソーランの導入の理由として、舞踊がブラジルへ紹介される以前に、この世代の間にはいわゆる「伝統文化」の実践とは異なる自己表現の手段を求めていた者がいたことも指摘できる。こうした期待に、YOSAKOI ソーランが応えることとなる。

彼/彼女らは、既に三世や四世であるゆえにもはや日本語を十分に理解することはできないが、日本文化には関心がある。日本文化が上の世代の者たちから継承されるだけでなく、彼/彼女ら自らが日本文化に関する情報を得ようとしている。インターネットを使ってポータルサイトに入り、キーワードを入力して、興味を持つ日本の文化と関連するウェブサイトを簡単に見つけ出している。

10~20 歳代の若者から成る三世、四世の世代は、世界規模での多文化主義の潮流の中、また日本文化ブームの中で育った。ブラジルは植民地時代より様々な形態の人の移動によって形成されてきた社会であるが、20 世紀を通じて支配的であった国民国家イデオロギーは人々に、一つの民族のように文化的同質性を持つ「国民」となることを求めてきた。アフリカ起源の踊りに複数のジャンルの踊りが融合されて民衆の間で発展したサンバが 1930 年代半ば以降ヴァルガス (Getúlio Vargas) 大統領によって国民統合のシンボルとして利用された様に、ブラジルではハイブリッド性の顕著な文化が 20 世紀を通じて国家によってナショナル・アイデンティティの形成に利用されてはきたが、実はハイブリッド性を超えて同質の「国民」を造ることが国家の目的であり、その手段として人種的及び文化的混雑化が提唱されてきたにすぎない。国民の多様性を公式に認め、なおかつ多文化主義が国是とされたのは、1988 年に公布された新憲法に

⁶ ブラジルにおいて短期間の普及を可能にしたのは、この振付解説付きビデオテープと祭りのダイジェストが収められたビデオテープであった。日本とブラジルの距離、経費の面からみても YOSAKOI ソーランの経験者や振付師を日本からブラジルへ呼び寄せるのは難しい。現在では、YOSAKOI ソーランを日本で踊った経験のある日本人留学生が舞踊を指導したブラジルの団体もある。

においてである⁷。

多文化主義は集団間の文化の差異を前提とするため、本質主義的な文化観に基づきやすい。しかしながら、多様な文化が共存することを認めたことは、諸文化がハイブリッド化して新しい文化が生成される土壌を形成した。

ブラジル独自の「YOSAKOI SORAN」の創作

こうして多様な文化の価値が認められ始めたブラジルの土壌に、日本の YOSAKOI ソーランは持ち込まれた。2000 年に入ると、舞踊を導入した団体数も増加した。2003 年からは「YOSAKOI SORAN 大会」⁸が毎年開催されるようになり YOSAKOI ソーランを導入した団体が一堂に会する機会が生ずると、団体間の差別化が図られるようになった⁹。差別化を図る中で、

⁷ ブラジルの多文化主義への移行は、1960 年代に始まる。1964 年にクーデターによって発足した軍事政権は、民族的、文化的多様性を国家の分裂の要因としてではなく、発展と富の要因としても捉えるようになり、「多様性のブラジル」像を積極的にアピールし始めた。具体的な変化として、外国語学校の開校、サンパウロ市観光局による「東洋街 (Bairro Oriental)」の再開発の着手などが挙げられる (三田 1999)。

⁸ この「YOSAKOI SORAN 大会 (Festival de Yosakoi Soran do Brasil)」は、日本の YOSAKOI ソーラン祭りと同原則的に同じルールで行われるが、ブラジル人が参加するコンクールであるところは異なる。ブラジルでの YOSAKOI ソーランの普及と団体間の交流を図ることを目的に、2003 年に始まった。開催者は個人の篤志家で、1970 年代にブラジルに移住しサンパウロ市を中心にチェーン展開している美容院を経営する日本人社長である。ポルトガル語の“festival”は通常「祝祭」や「祭り」等と訳されるが、YOSAKOI SORAN 大会組織委員会が日本語で話すときや書類に記すときに「大会」を用いているため、本稿もその訳を使用する。

⁹ 参加者の間に「競争」を生じさせたとして、大会を批判する者も多い。2004 年の第 2 回大会でコンクール形式となり、審査員から最も高得点を得た団体に 8000 レアル (2006 年 3 月 29 日現在で約 42 万円) の賞金が与えられるようになってからは、大会を批判する声も一層高まった。その一方で、YOSAKOI SORAN 大会がもたらす正の変化を感じる参加者もいる。大会を通じて他団体と交流できたこと、大会が各団体の活動目的を認識あるいは再認識させ、目標の明確化をもたらした、といった点が評価されている。そもそも、YOSAKOI SORAN に取り組む者たちがそれぞれの踊りを比較し、競争心を持つことは自然なことである。また、競争が参加者に踊りに取り組む楽しさを提供しているのも事実である。「競争」は遊びの種類の一つでもあり (カ

参加者は舞踊を通じて表現したいものを積極的に問うようになった。その中で、日本の模倣を超えて、ブラジル独自のものとして YOSAKOI SORAN を創作する試みも出てきたのである。

YOSAKOI SORAN の独自性は一つに、動きや音楽に「日本的なもの」や「ブラジルのもの」という複数の文化を混ぜ合わせることに求められた。なぜなら、ハイブリッド化こそがブラジル社会の独自性であると理解されたためである。

ハイブリッド化という現象自体を、参加者たちは、日本の YOSAKOI ソーランを導入して以来、強く意識してきた。YOSAKOI ソーランにはソーラン節という民謡に代表される伝統性と、速いリズムの音楽に代表される現代性が混ざり合っていたためである。また、舞踊のハイブリッドな特徴を多文化社会であるブラジルの姿と重ね合わせて、この舞踊が「ブラジルに合う」と感じる者が多かった。そうした親しみやすさが、受容を促進した要因にも、参加者をブラジル社会に対して再帰的にさせた要因にもなった。

パラナ州で活動する団体は、彼 / 彼女らの YOSAKOI SORAN にブラジル北東部の音楽・舞踊「パイオン (baião)」を取り入れている。文化的諸要素を混ぜ合わせるということについて、参加者の AT (日系三世・20 代半ば) は次のように述べている。

(日本的なトーンとブラジルのトーンを混ぜ合わせて彼の団体のオリジナル曲の作曲が行われたと話した AT が、「そのように踊りの中に複数の文化が混ぜ合わされていることをどう思うか」と質問を受けて) そうだね、とても興味深いことだと思うよ。だって、実際、ブラジルそのものが様々な民族によって形成された国だろう。だから、例えば、サンバは事実アフリカから少し来ているし。僕が

イヨワ 1970)、競争の中で自身の技能を試す際に人々は興奮や楽しさを覚えるものである (チクセントミハイ 1991)。

言いたいのはね、こうした混ぜ合わせは東洋系の僕にとって、僕はブラジル人なんだ、だってブラジルで生まれたからね。だけど、僕にとってこれらの二つの文化を一つにすることはとても嬉しいことなんだ、あとそれをブラジル人に伝えられることもね¹⁰。

AT は文化のハイブリッド化を「ブラジルらしさ」として、さらに彼自身をハイブリッド化という行為の主体として捉えている。

また AT の発言から、彼が非日系人と積極的に関わり合うことを求めているのが分かる。ブラジル日系社会における日本文化の継承を研究した小嶋が、これまでほぼ日系社会の中で享受されてきた日本文化を今日では日系人がブラジル社会のために活かそうとしていることを既に指摘している(小嶋 1999)。この流れの中で、日系社会の諸活動に非日系人の参加が奨励されている。このパラナ州の団体が属する文化慈善協会もまた、日本文化を通じてブラジル社会に貢献することをその活動方針としており、新しい「日系社会」のあり方を体現した団体である。この団体は非日系人と日系人の既存の関係を発展させるものとして、日本の祭りを YOSAKOI ソーランの導入以前に既に取り入れていた。2003 年から毎年 9 月に「マツリ (Matsuri)」¹¹を開催している。開催場所である市の広場には日本食の屋台が立ち並び、やぐらが組まれ、踊りの発表、太鼓の演奏などが行われる。入場は無料である。マツリの初開催に向けて準備を進める中、文化慈善協会は北海道出身の日本人男性から紹介された YOSAKOI ソーランを、マツリの目玉の一つとして導入した。

サンパウロ市で活動する青年の YOSAKOI

SORAN サークルも、非日系人の参加を奨励している。さらに、この団体のメンバーの中には、これまで日系社会を支えてきた「日系人」という枠に疑問を持つようになった者もいる。元メンバー MM (日系三世・30 代前半) がインタビューで「日系人」という枠に対する疑問を語ったことがある。

このサークルは、サンパウロ市のブラジル日本文化協会の青年部委員会と北海道協会青年部の若者によって発足した。MM がサークルの発足理由を、「社会のために団体を強化し、文化的表現を豊かにするため」と筆者宛のメールに記したことがあった。サークルの発足と関る「社会」が指し示すものをインタビューで説明する中で、彼は「日系人」という枠に対する疑問を語り始めた。

(「あなたがメールで書いていましたね、二つの団体が一つになったのは『団体を強化して、文化的表現を豊かにするため、それは社会のために』と筆者に言われて) ブラジル社会ね。(「ブラジル社会ですか。でも、あなたはブラジル社会なのか、例えば、日系ブラジル社会とか、日系社会とかは言わなかったわ、だから考え込んでしまったのだけれど」と言われて) 今、君が話していること、とても重要なことだよ。文化、価値、日本文化、あるいは日系ブラジル文化かな、より僕たちに合うのはね、その文化っていうのは僕たちが生活している社会、つまりブラジル社会をすごく助けるものなんだ。昔は日系コロニアを強化するっていう考え方があった。今日では、その考えはちょっと古くなってしまった。だって、異種族混淆がますます起こって、そしてますます進化するにつれて、興味深くそして重要なのは、文化やとても大事な価値を有するものを通じてブラジル社会を助けることだって皆が気づいたんだ。もちろん、踊りだってそうだ。だから、文化を広めたり、若者同士で交流したり、僕たち青年文協は、青年のことを考えて、そしてブラジル社会のことを考えて、様々な活動を行っている。だから、慈善のイベントを

¹⁰ AT には 2005 年 7 月 19 日にインタビューを行った。

¹¹ 正確な祝祭名は、団体 E が活動する町の名の後に “Matsuri” を加えて名づけられた“(町の名前) Matsuri” である。

僕たちも多く開催しているし、食料を集めるためや、援助が必要な団体への寄付金を募るために、他の団体と一緒にって慈善イベントに参加したりイベントを手伝ったりしているよ。そうしたイベントのすべてにおいて、アトラクションとして日本文化、踊り、料理を利用しているよ。(「そもそも、日系コロニアと言ったり、日系ブラジル・コミュニティと言ったりするけれど、それらの言葉の意味には違いがあるのですか」との質問を受けて)じゃあ、きみの意見では、メスティソ¹²はどこに入るのかな。彼らは日系、それとも違うのかな。(「日系だと思う」との答えを聞いて)今日の考え方をみてみよう。それはもう重要なことではないよ。そのことを知ることに重要性を見出せない。重要なのは、人種に関係なく、ブラジル人だろうが、日系だろうが、イタリア系であろうが、日本文化が好きであること、価値ある文化が好きなことだよ¹³。

MM は、「日系人」という枠がそもそも混血の日系人を除外しがちであることを問題にし、さらに、この「日系人」という枠を意図的に忘れることで、ブラジル社会における日本文化あるいは日系人が創造した文化が日系社会を超えて享受されるとも語った。彼は、非日系人との関わりが常態である日常生活だけでなく、文化活動においても不可欠であると捉えている。

こうして YOSAKOI SORAN の創作過程において、日系人参加者は、多様な民族的、文化的背景の人々との関わりを意識するようになった。その関わりを強化するために様々な演出を

¹²MM の「メスティソ (mestiço)」は、日系人と非日系人の混血の者を指している。スペイン系アメリカ諸国において、「メスティソ (mestizo)」は、先住民と白人の混血を指するのが一般的だが、ブラジルにおいてメスティソは、様々な人種の混血として広義に解釈されている (Skidmore 1974: 23)。だが、これは日常的に用いられる表現ではない。サンパウロの日系人の間では、日系人と非日系人の混血の者を指すのに使われることがある。

¹³MM には 2004 年 4 月 2 日にサンパウロ市にてインタビューを行った。

YOSAKOI SORAN に施す。パラナ州の団体がパイアオンを取り入れたのも、演奏者と観客の一体感を醸成させるというパイアオンの効果を、YOSAKOI SORAN の演舞者(日系人が主)と観客(非日系人が主)の間にも狙ったためである。AT が次のように語っている。

えっと、ブラジルでは、観客と一体になるっていうのが受けるんだ、観客を踊りに招いたり、一緒に歌ったりね。(練習場に向けられていた団体のオリジナル曲をききながら)だから、この部分では、ああ、ここが僕がコメントしたところだよ、音楽がパイアオン風になっているところ。僕、僕がみんなに大声で言うんだ、「皆、注目！ブラジルのリズムになったよ。パイアオンだよ」ってね¹⁴。

AT がみせたメモには、ひらがなで次のように書かれていた。

さてみなさま、ブラジルとくゆうリズムだよ。パイアオンでございます。きれいなブラジルのあじだよ。どうもありがとうございます。またこんどあいましょうね。みなさんおたのしみに。おげんきでね。さようなら。

こうして、「ブラジルらしさ」が追求され始めた創作過程で、日系人がそれぞれ彼/彼女らについて再考し、自己表現を模索する中で非日系人の存在を欠かせないものとして理解、あるいは確認するようになる。

パイアオンがブラジルの「特有さ」を示すものとしてパラナ州の団体に取り入れられたように、YOSAKOI SORAN で混ぜ合わせられる「日本的なもの」や「ブラジルのなもの」はいずれも、国際的にも国内的にも広く普及しているイメージである。例をさらに挙げると、動きに関する「日本的なもの」は腰をしっかりと落として安定させる、それに対し「ブラジルのなもの」

¹⁴2005 年 7 月 19 日に行ったインタビューでの発言。

は腰の力を抜いて腰が動くようにする、という対照的な特徴が挙げられる。日系三世や四世の若者は、若い世代を表すのに「ブラジルのなもの」、祖父母の世代を表すのに「日本的なもの」を取り込んで、各世代を対照させることがある。

参加者がYOSAKOI SORANに加えたと言語「ブラジルのもの」の中には、ニューヨークで生まれたサルサやストリートダンスのヒップホップといったブラジル起源ではない舞踊が含まれることがある。それらの舞踊がブラジルで人気があることと、動きやリズムにおいて「日本的なもの」とは対照的であることから、「ブラジルのもの」に含まれて語られるのである。

サルサが「ブラジルのもの」に含まれてしまうように、文化的諸要素が真に「日本的」であるとか、あるいは「ブラジルの」であるかの客観的な議論に参加者が立ち入ることはほとんどない。日系人参加者はブラジル社会そして彼/彼女ら自身が既にハイブリッド性を有していることを際立たせるために、「ブラジルのもの」と「日本的なもの」という枠を用いている。

YOSAKOI SORAN の創作を通じて

日系人の参加者はYOSAKOIソーランに取り組み始めた当初から、日本とブラジルの舞踊様式の違いを体感していた。この舞踊様式の比較が第一に、参加者をブラジル社会について再帰的にさせた。第二に、ブラジル独自のものとしてのYOSAKOI SORANを創作しようとする試みが、参加者を一層再帰的にさせた。

再帰的となった日系人参加者は、非日系人の参加を一層奨励するようになる。ハイブリッド化を特徴とする社会に生きながら、YOSAKOI SORANの活動に非日系人がいないのは不自然であると考えられたためである。また、ブラジル独自のものとしてYOSAKOIソーランを変容

させるために舞踊を意図的にハイブリッド化させたことが、結果として「日系人」という枠を超えて参加者を募ることを可能にしたことに気がついた。彼/彼女らにとっては、文化のハイブリッド化は文化の流動的な状態だけを意味するのではなく、多様な民族的、文化的背景を持った人々とのコミュニケーションを深めるツールとなった。

ツールとして行う舞踊のハイブリッド化が「日本的なもの」や「ブラジルのもの」を二項対立的に捉えて混ぜ合わせるものであっても、日系人参加者にとっては、ハイブリッド性に関する先行研究が批判してきた「文化間の優劣を示す」(Young 1995; Werbner 1997)行為でも、「日本的なもの」に自身を収めてしまう行為¹⁵でもないのである。

結論

これまでに述べてきたように、YOSAKOIソーランの導入、そしてYOSAKOI SORANの創作という過程で、日系人の参加者は、日本の祭りの流れを汲むYOSAKOI SORANを通じてこそ、様々な人々と関り合いながらブラジルに生きる自己を表現できると認識した。

日系人の参加者の多くは、彼/彼女らが日本移民の子孫であるという意味の「日系人」であることを認識している。日本とブラジルの文化的諸要素を比較することによって、また、日本とは異なるブラジルのYOSAKOI SORANを創

¹⁵ これまでも日本移民は、「日本」と「ブラジル」を対照的に捉えることによって、移民先のブラジル社会の理解を試み、さらに「日本人」としてのアイデンティティを確立してきた、と前山は指摘している(前山 1996)。「日本語」に対する「ブラジル語」、「日本宗教」に対する「ブラジル宗教」を語ることで、日本移民はブラジル社会の把握を試みた。この「ブラジル宗教」というのは多義的でカトリックから「カンドンブレ(candomblé)」といったアフリカ系宗教に至るまで含まれている。だが、このような二項対立によって、戦前、戦後の日本移民一世は自身の「日本人」アイデンティティを確立することができたのである。

作することによって参加者が彼／彼女らについて再帰的となると、「日系人」といった範疇を用いる。だが、そのような認識と範疇の利用が、必ずしも参加者による「日系人」としてのアイデンティティの構築を意味しているのではない。

山ノ内は、今日のブラジルの若い世代の日系人が形成しているのは、「ニッケイ (nikkei)」¹⁶ というアイデンティティであると述べている（山ノ内 2003）。そのアイデンティティは、日系人が時と場合によって、祖先である日本人の文化的また身体的特徴を受け継いだ「日本人性」を表現したり、ブラジル人であるという「国民性」を表現したりすることができる重層性を持つものである。一世が確立しようとしてきた、本質的な「日本人」としてのアイデンティティとは異なる。小嶋もまた、今日の日系人のアイデンティティを「ニッケイ」という言葉で記している（小嶋 2005; 小嶋 2007）。日本で用いられる「日系人」のイメージを踏襲するのではなく、日系人自らがアイデンティティとしてアルファベットで示す「ニッケイ」を積極的に用い、彼／彼女らの独自性を表現しているという（小嶋 2005: 107-108; 小嶋 2007: 287）。

山ノ内と小嶋が「ニッケイ」としたのは、若い世代の日系人が「ニッケイ」を用いていることをブラジルで観察したためである。だが、山ノ内と小嶋の論文では、「ニッケイ」が具体的にどのような場で主張され、実際にどの程度まで日系人の間に普及しているのかは明らかにされていない。少なくとも、YOSAKOI SORAN

に参加する若い世代の日系人が自らのアイデンティティを「ニッケイ」と表現したことはない。これまでも日系社会で用いられることがあった「ニッケイ」を、若い世代が彼／彼女らのアイデンティティの呼称として独自に使い始めているとしても、そのような使用に至った過程と用いられ方についての分析は、山ノ内と小嶋にはみられない¹⁷。

さらに山ノ内は、「ニッケイ」というエスニック・アイデンティティが成り立つには、他者としての非日系人の存在が不可欠とする（山ノ内 2003）。山ノ内は「ニッケイ」を、非日系人である「《ガイジン》」に対する対抗的なエスニシティ（山ノ内 2003: 154）と表現している。しかし、本稿が明らかにしたのは、「非日系人」は「日系人」を成り立たせる対照的な他者として存在するのではなく、YOSAKOI SORAN に取り組む各日系人がアイデンティティを形成あるいは確認していく際に欠かせない存在であるということである。

YOSAKOI SORAN の参加者の中には、「日系人」や「日系」、「ニッケイ」という枠が非日系人を「他者」として位置づけてしまうということ強く意識するようになり、そのことを問題として捉えるようになった者がいる。サンパウロ市で活動する YOSAKOI SORAN サークルの元メンバー MM もその一人であった。

山ノ内と小嶋は、日系人が形成してきた／しているアイデンティティを、既存の「日系人」や「ニッケイ」という範疇に収めてしまっている。山ノ内は、民族集団がその「客観的」な文化的差異によってではなく、他集団との境界を

¹⁶ 山ノ内の「ニッケイ」は、複数形を示す s をつけて "nikkeis" とポルトガル語表記されている。各日系人のアイデンティティの多様性をも認めるのが、「ニッケイ (os nikkeis)」というあり方である。日系人という集団内部でもアイデンティティのあり方は多様である。そのような多様性をも認めるものとして、「ニッケイ」が提示されている（山ノ内 2003）。

¹⁷ 米国の日系人の間でも、それまでの「日系アメリカ人 (Japanese Americans)」ではなく、「ニッケイ (nikkei)」が用いられている。ブラジルで日系人が「ニッケイ」を用いるようになった背景には、米国の日系人の影響を受けるなどの地域を超えた要因も絡んでいると思われる。

生み出し維持することで成立するとしたバルト (Fredrik Barth) の理論を参照している。そのため、山ノ内は、日系人が非日系人との差別化を図る、境界の構築過程の解明に固執してしまい、日系人のアイデンティティをもまた、境界によって区切られる範疇にそのまま一致させている。

YOSAKOI SORAN の動きや音楽には、「日本的なもの」や「ブラジルのもの」といった枠が保持され続けている。だが、これらの枠(山ノ内のいう境界)は日系人参加者にとって、文化のハイブリッド化が進んできたブラジル社会に生きる自己を改めて認識するという再帰性を促す機能を果たしている。日本の祭りの舞踊の受容、そしてその変容の過程を経て日系人参加者は、国民国家建設のために国家が求めた同質的な国民でもなく、多文化主義が本質化した「東洋街の日本人」でもない、ハイブリッドなアイデンティティを、YOSAKOI SORAN によって非日系人とともにパフォーマンスしてみせたのである。

参考文献

- Babcock, Barbara A. 1980. "Reflexivity: Definitions and Discriminations." *Semiotica* Vol.30. No.1/2: 1-14.
- Barth, Fredrik. 1969. "Introduction." In Barth, Fredrik (ed.) *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Cultural Difference*. London: Allen&Unwin: 9-38.
- Bhabha, Homi. 2005. *The Location of Culture*. Routledge Classics Edition. London and New York: Routledge.
- カイヨワ、ロジェ. 1970. 『遊びと人間』(清水幾太郎訳) 岩波書店.
- チクセントミハイ、M. 1991. 『楽しむということ』(今村浩明訳) 思索社.
- Garcia Canclini, Nestor. 1995. *Hybrid Cultures: Strategies for Entering and Leaving Modernity*. Minneapolis and London: University of Minnesota Press.
- 小嶋茂. 1999. 「ブラジル日系社会における芸能の伝承と変容 パラナ民俗芸能祭をめぐる一考察」『イベロアメリカ研究』第21巻、第1号: 69-79.
- . 2005. 「日系人からの脱皮 新しいアイデンティティとしてのニッケイ」『アジア遊学 特集アジア「日本・日系」ラテンアメリカ: 日系社会の経験から学ぶ』第76号: 101-108.
- . 2007. 「ブラジル、パラナ民族芸能祭にみる文化の伝承 日系コミュニティの将来とマツリ、そしてニッケイ・アイデンティティ」山本岩男ほか編『南北アメリカの日系文化』人文書院: 273-288.
- 前山隆. 1996. 『エスニシティとブラジル日系人 文化人類学的研究』御茶の水書房.
- 松平誠. 1990. 『都市祝祭の社会学』有斐閣.
- 三田千代子. 1990. 「国民国家から多人種多民族国家へ ブラジル日系人の辿った道」水野一編『日本とラテンアメリカの関係 日本の国際化におけるラテンアメリカ』上智大学イベロアメリカ研究所: 51-66.
- Myerhoff, Barbara & Jay Ruby. 1982. "Introduction." In Ruby, Jay (ed.) *A Crack in the Mirror: Reflexive Perspectives in Anthropology*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press: 1-35.
- Ortiz, Renato. 1994. *Cultura brasileira e identidade nacional*. 5ª edição. São Paulo: Editora Brasiliense.
- Skidmore, Thomas E. 1974. *Black into White: Race and Nationality in Brazilian Thought*.

付録 調査対象団体概要

項目	団体	A	B	C	D	E
団体の属性及び構成		社員による YS サークル。企業公認。サンパウロ市で活動。	青年の YS サークル。サンパウロ市の日本文化協会と北海道協会の青年部が 2003 年に結成。元の 2 団体から独立して活動。	サンパウロ州内陸部にある日系人の農場が所有するバレエ団。農場の住民によって構成。	日本の民俗舞踊の習得を主とした文化団体。パラナ州で活動。地元の日本文化協会に属していない。	日本文化を通じて慈善事業を行うことを目的に活動する協会に属して、YS に取り組むグループ。パラナ州で活動。
導入の経緯と狙い		日本人である社長が日本の知人を通じて YS 祭りを知る。社員教育の一環として、また日系社会での普及を目的に、2002 年に導入。	留学等で来日した際に YS を知ったメンバーからの紹介。元の 2 団体とも、メンバー間の親睦とブラジルでの日本文化の普及を目的に導入。	ブラジルの YS 大会組織委員会に関する知人が YS 祭りを紹介。YS から着想を得て、漁師の世界を表現した舞踊を 2002 年の公演で披露。	同州他市の舞踊祭で YS の踊りをみた日系一世男性から、舞踊の存在を伝え聞く。子どもたちに受容れられやすいと考え、2002 年に導入。	北海道からブラジルに渡って日本語等を教えていた日本人男性からの紹介。協会が開催する祭りの目玉の一つとして、2003 年に導入。
担い手とリーダー		オフィシャル・グループでは 20 代の非日系人が主。25 人程度。振付者が団体をまとめる。	10 代、20 代の日系人が主。25 人程度。リーダーはいない。	10 代の若者が主。25 人程度。日系人のみ。舞踊家の女性が指導。リーダーはいない。	メンバーの年齢は 8～14 歳、人数は 60 人程度。日系人は 1 人。年長者が年少者の面倒をみる。	10 代の日系女性が主。25 人程度。三世の 20 代後半の女性がリーダー。
YS 活動内容		勤務後の練習。	YS 大会の数ヵ月前に練習開始。	バレエの演目と併せて YS を練習。	民俗舞踊の練習と併せて YS を練習。	週に 2 回、年間を通じて練習。
浸透とその度合い		YS の創造性や集団性に共感。創作に意欲的。	YS の習得に参加者が熱心。創作に意欲的。	若い男性の参加が増える。振付にも若者が参加。	ブラジルのものに似た、YS のリズムが参加者の活気を取り戻した。	日本の YS 祭りの映像をみて、参加者が強い感銘を受ける。
定着の形と度合い及び抵抗の諸要素		ストリートダンスにも取り組みたいという参加者により「日本的」な YS を望む社長との間で意見の相違。	大会向けに創作されることで失われる「日本らしさ」と活動目的が大会での入賞となることに対する危惧。	演目の一つとして定着。YS の速い動きとリズムが「日本らしくない」として否定的に捉える。	演目の一つとして定着。地元の歴史や風景を表現した、YS の創作。地元での活動を目指す。	協会の公式な活動の一つとなる。創作に意欲的。
団体の拡大と外延的発展		企業内で YS に取り組むグループの数が増加。	既存の日系団体の枠を超えて、メンバーを募集。日系社会のイベントに積極的に参加。	ブラジルの他の舞踊団体と交流する際に、YS を踊り、指導する。	近隣市町村から各種イベントに招待される。	各種イベントに招待される。協会が開催する祭りのメイン・イベントの一つに。
ハイブリッド的諸要素と度合い		動きの基本はストリートダンスやブラジルのアシェー等。所々に漁師の所作を取り入れる。	音楽で J-POP とソーラン節を使用。「日本的なもの」と「ブラジルのなもの」を意識的に区別。	バレエに代表される西洋の動きと日本人の所作を同時に行う。	動きにタップダンスを取り入れる。地元の民俗音楽に合わせて踊る YS の創作を試みている。	ブラジル北東部の舞踊パイオンのリズムを団体が作曲した音楽に、「観客に語りかける」という効果を演出に、取り入れる。

(出所) アンケート、聴き取り調査及び文献調査より筆者作成。

(注) 表では YOSAKOI ソーラン及び YOSAKOI SORAN を YS と表記。人数や年齢層はアンケート回答時の 2004 年時点のもの(団体 E を除く)。

New York: Oxford University Press.

竹沢尚一郎. 1998. 「祭の変容」島藺進・越智貢
編『情報社会の文化4 心情の変容』東京
大学出版会: 49-77.

坪井善明・長谷川岳. 2002. 『YOSAKOI ソー
ラン祭り 街づくりNPOの経営学』岩波
書店.

ターナー、ヴィクター. 1981. 『象徴と社会』(梶
原景昭訳) 紀伊国屋書店.

Werbner, Pnina. 1997. "Introduction: The Di-
alectics of Cultural Hybridity." In Werbner,
Pnina & Tariq Modood (eds.) *Debating Cul-
tural Hybridity: Multi-Cultural Identities and
the Politics of Anti-Racism*. London & At-
lantic Highlands: Zed Books: 1-26.

山ノ内裕子. 2003. 「ブラジル日系人のエスニ
シティ形成に関する研究」九州大学提出博士
論文.

柳田國男. 1998. 「日本の祭り」『柳田國男全集
13』筑摩書房: 355-508.